

スベボタ：2050年生まれのプラントハンター

村中智明（鹿児島大学）

2020年はSFが現実化した年のように思える。感染症であつという間に生活様式が変わってしまった。古典なら「復活の日」、近年だと「天冥の標」を思い出さずにはいられない。「暗黒森林」にも似た話が出てきてドキッとした。その一方で、量子コンピュータなんて格好いいものが実用化され始めている。マウスの人工冬眠が発表されたと思えば、手塚治虫が描いた銀色のロケットをSpaceXが飛ばしている。はやぶさ2は小惑星の砂をもたらし旅立った。世界各地にモノリスが発見されている。あとは、軌道エレベーターへの技術革新ができれば完璧だ。「楽園の泉」では、赤道の島国に軌道エレベーターを建設するが、自然保護のような話が出てくるのは先見の明があると感心した。

さて、私はSFが好きだ。宇宙に生物がいるとしたら、いわゆる「生産者」の方が多いだろう。恒星から降り注ぐ光エネルギーを利用するか、潮汐力によるたわみで生じる熱を利用するか、地熱が作る高温噴出孔の化学エネルギーを利用するかは知らないが、エネルギー供給地に定位し、化合物合成というエントロピー低下を進める存在。どんな星系でも、そんな植物のようなものが、最初に現れ、生態系の基盤となるだろう。この考えは、私が植物の分野に進路を決めた理由の10%程度を説明する。あれから、10年以上が経って、そういう気持ちは忘れかけていたが、30年後の植物学ということで、ふと思い出した。

植物の面白さは無数にあるけれど、多様性の大きさに賛同する人は多いだろう。未開の地には、まだ見ぬ植物がある。プラントハンターという言葉ができた理由である。なら、未開の星には・・・？別の星の植物なんて夢物語かもしれない。だが、地球にはいるのだから、夢は捨てられない。昔テレビでみた話だが、隕石によって吹き飛ばされた地表は、その一部は宇宙を漂い、別の惑星に降りる可能性があるという。生命の誕生以降も、隕石は落ちてきている。太陽系の別の星に、地球生まれの別系統があってもよいかもしれない。我々の植物学は、別の星の植物相に通用するだろうか。こう考えるだけでも楽しくなってくる。グローバル化が叫ばれているが、科学は元来ユニバーサルである。ユニバースすなわち宇宙全体に適用できるものを目指すべきだ。

南硫黄島は絶海の孤島である。ここに調査に行くには、植物の知識に加え、ロッククライミング、野営などのスキルが必須となる。宇宙時代はもうすぐである。ある日、突然に、別の惑星に植物が見つかるかもしれない。スペースボタニー、スベボタの幕開けである。そこから宇宙旅行の訓練をしては間に合わない。来たる宇宙船ビーグル号に乗るための競争はすでに始まっているのだ・・・！

とりとめなく書きましたが、2050年に生まれて、植物の研究を志す人は、宇宙旅行の訓練をしている時代になっていたら楽しいなと思うわけです。ケン・ソゴルのようにタイムリープしている可能性もあるけれど。